おおた多文化共生研究会 設立に関わる経緯 及び 現在に至る活動履歴

共に働き、共に暮らす
調和のとれた多文化共生社会（Harmonious Multicultural Society）を目指して

おおた多文化共生研究会
OTA Institute of Multicultural Society （OTA IMS）
代表理事 金子 信行

◎現況認識
大田区住民基本台帳によると
2023.1.1 総人口 728,425人 外国人25,034人 外国人の総人口に占める比率 3.4%
2024.1.1 総人口 733,634人 外国人28,397人 外国人の総人口に占める比率 3.87%
2025.1.1 総人口 740,519人 外国人32,041人 外国人の総人口に占める比率 4.3%
2025.7.1 総人口 745,126人 外国人33,638人 外国人の総人口に占める比率 4.5%

2023.1.1 から2025.7.1までの2年半の間に増えた外国人の人数は、8,604人。
外国人総数の占める増加率は25.6%になる。

仮に、２年半ごとに約25%の割合で外国人の人口が増えていくとすると、
１０年後の２０３５年には、大田区内の外国籍住民は、およそ８万人になる。
大田区の人口のおよそ１０%強に当たる。

我が家の近くの池上第二小学校には およそ５００名の児童が在籍している。
10年後には、50人の外国籍児童がいる。
我が家が会員になっている町会 中央八丁目町会 には、今、凡そ１３００世帯 ２７００人が暮らしている。
10年後には、130世帯270人が 外国籍の隣人になっている。

大田区に生まれ育った私自身の肌感覚も、蒲田駅周辺を歩いていると、１０年前に比べて、若い外国籍住民の方々が増えたと実感している。

◎私のバックボーン
1956年に大田区堤方（現 大田区中央）に生まれ、今でも誕生した時と同じところに二世帯住宅に、息子家族と共に７人で住んでいる。

私は、1964年に開催された東京オリンピック後の英語ブームもあり 小学５年生の時から近所の英語教室に通っていた。
その関係で、1970年の秋に、当時の立川米空軍基地の軍属のご家庭に１泊２日のホームスティをさせていただいた。
その時から私の国際交流活動が始まった。

ゲートを潜ると もう そこはアメリカ、匂いまで日本と違う いい匂い だったのを微かに覚えている。

その後、高２（1973年）の夏に、アメリカ オレゴン州の見渡す限りの麦畑の中の一軒家に１ヶ月間のホームステイをした。

1977年には、韓国のソウルでホームステイをした。
当時のソウルは灯火管制が敷かれ、夜中の１２時には 街中 全て真っ暗になっていた。
韓国でホームスティした経験は、その後の私に大きな影響があった と言っていいだろう。

アメリカに象徴される「憧れる西洋社会」。
一方、お隣の国、韓国とは 歴史的な感情の対立、そして、偏見が互いに距離を遠ざけ 近くて遠い国 だった。
正直に言えば、一方を少し見上げ、一方を少し見下ろしていたのでは と 思う。
韓国の家庭で二週間ホームスティさせていただけたことは貴重な経験だった。

結婚してからも妻と共に国際交流活動を続けた。
愛知県長久手町（現 長久手市）にあった私たちの住まいから100m 程 のところに、
当時の通産省の外郭団体、海外技術者研修協会（AOTS）中部研修センターがあった。

週末の土日を利用しての一泊二日のホームステイが盛んに行われた。
アジアを中心とした研修生の受け入れを、我が家でも繰り返し体験してきた。

私たちの二人の子供は、研修生に抱っこされたり、膝の上であやしてもらったりという環境の中で育った。
子供たちには、世界中には様々な人がいること、話す言葉が違い、肌の色も違うが 同じ人間がいるという「多文化共生意識」が 生活環境の中で 自ずと醸成されたと思う。

1992年の夏、私たち家族全員がユタ州のCedar City 在住のEdwardsさん宅で ホームステイをさせていただいた。
楽しく、貴重な経験ができた。
30年後の2022年に、そのEdwardsさん夫妻を 妻と一緒に再度訪ね、ホームステイをさせていただいた。
30年という時を超えても交流したいと思える大切な友人がいたからだ。

およそ15年前だったと思う。
私たちの地元にある東京工科大学附属日本語学校の留学生として 韓国から来日したJ君と奇跡的な出会い があった。

来日して間もないJ君が、寮に帰る途中 道に迷い、近くを流れる呑川に掛かる橋の上で、偶々 通りかかった娘に助けを求めたのだ。
娘は母親と連携し、無事にJ君を寮まで送り届けた。

それ以来、J君の家族とは、互いに行ったり来たりしながらホームステイをしたり と 家族ぐるみの交流に発展し、継続することができた。
J君は、今では日本語を流暢に話し、日本の企業に就職し 永住権を得て大活躍している。

「本当の家族ではないけれど、本当の家族のように大切に思える友人」がいる。
心を開き、同じ「人」として出会い、仲良くなっていく。
どんな「人」とでも、心を開いて交流すれば、同じ「人」として仲良くなることができる、という体験を積み重ねて来た。

白地図の世界地図を広げると 友人の顔 が見えてくる。

◎「多国籍タウン 新大久保」の「インターナショナル事業者交流会（四カ国会議）」
コロナ禍以前に、テレビで 新大久保商店街の 今 が紹介されていた番組を見た。
「多国籍タウン 新大久保」として韓国、ベトナム、ネパール、日本のお店が所狭しと並び、活気にあふれている。
新大久保商店街振興組合の当時のＩ理事長に、商店街の様子を聞きたく連絡を取った。
二つ返事でお会いしてくださるとのことになり、商店街の中のお店で話をお聞きした。

「最初は、ゴミ出しのことから始まったんです。」と。
「その後、何回も集まりを重ね、なんでも話し合えるような関係性が出来てきた。」
やがて、その集まりは「インターナショナル事業者交流会（四カ国会議）」となり、
各国の経営者の方々が「互いの事業の知り、地域の様々な問題を話し合っていった」そうだ。
その成果の一つとして「新大久保フェス」というお祭りを事業者交流会が主体になって開催したそうだ。

その後、コロナ禍に。

久しぶりにＩ理事長にメールを送ると 返信が来た。
以下に紹介する。（I 様のご了解を得ています）

「お久しぶりです。
　コロナは高額な家賃を払い従業員を抱えているお店は大変でした。
　融資、補助金、給付金など日本人の私たちですら
　手続きがわかりにくかったのに、外国の人達は大変でした。

外国人のためのこんな相談窓口があるなどの
情報をメールで流したり
ベトナム人の書類を韓国人が作ったり
お互いに助け合いながらここまできました。

（後略）
新大久保商店街振興組合　I」

緊急事態が起きた時、国籍を超えて仲間として助け合うことができたのだろう。
普段から顔を合わせ、何でも話し合える仲間になっていた。
それを可能にした「場」として「インターナショナル事業者交流会」が機能していた。
この交流会が「顔の見える関係性」を構築していたのだ。

これだ！

その後、私は、大田区第５期多文化共生推進協議会の委員として協議に参加した。
その協議会での議論を通して、新大久保商店街振興組合の「インターナショナル事業者交流会」に学び、大田区に「多国籍区民会議」を設ける提案をした。

様々な関係者が一堂に集まり、課題について話し合いを続け その場に集う人たちの「顔の見える関係性」が構築され、共に働き、共に暮らす仲間になっていく。
そういう多文化共生推進策を提案し、その「多国籍区民会議」の構想は 協議会の提言の一つとして区長に報告された。
https://www.city.ota.tokyo.jp/kuho/kuho_pdf/r03/kuho_20210511.files/20210511_p4.pdf

2025年7月にＩ元理事長（現顧問）に、私のメッセージ原稿を送った。
すぐに返信をいただいた。その内容から「多国籍タウン」の 今 が 分かる。

※その手紙を資料として一番最後に紹介しています。

◎技能実習生のための研修所への訪問
2023年の梅雨時のころ、20年以上前から 一緒に国際交流活動を楽しんできた友人が責任者をしている T研修所（千葉県）を１泊２日で訪問した。

インドネシアからの実習生40名あまりが、実習現場に入る前の研修を受けていた。研修所に到着すると、実習生たちが笑顔で出迎えてくれた。

二日間とも、研修所内で実習生と顔を会わすと、彼らは立ち止まり、私に深々とお辞儀をしながら「失礼します！」と挨拶をした。

一人も残さず全員である。
とても爽やかで、好感が持てた。

その実習生の行動は、T研修所の研修方針にある。
「実践的な講習」の中に、日本企業の行動規範講習がある。
　日本の企業における基本行動
　（５分前行動の実践、メモを取る、正しい返事、 はい！すみませんもう一度お願いします、使ったものを元に戻す。）

日本人、特に、実習先の企業経営者、管理者、先輩・同僚へ 丁寧に挨拶をすることができれば好感を持ってもらえる。
具体的で実践的な配慮である。

1ヶ月講習を終えた実習生にとって 研修所は 心の拠りどころ にもなっているようだ。
また、技能実習生と地域との 交流拠点 としても定着している。

この訪問を機に、おおた多文化共生研究会の仲間を、都合、三回 T研修所にお連れした。
百聞は一見に如かず である。

◎町の総務部になろう！
ご紹介で 我が家の近くにある食品製造業の会社を訪ね、業務部長の I氏 からお話を伺うことができた。
ベトナムからの技能実習生を受け入れ、概ね10年になるとのこと。
実習生候補との面接、寮の建設・管理、日本の生活のルール指導、社内への配慮、近隣住民への配慮、近隣町会と実習生の交流（祭り）の対応、トラブル発生時の対応 etc.

I 部長の実習生を受け入れるための様々な取り組み、配慮等には 本当に頭が下がった。
組織に人ありだ。

I 部長に伺った。「実習生は、御社にとってどういう存在ですか？」
「感謝しかありません。」
お弁当作りは 未明から仕事（調理）を始めるそうだ。

ある規模以上の企業、または、外国人財に対してトータルに対応できる「人」がいれば、社内で自己完結できるのだろう。
しかし、そう出来ない規模の企業、または、在留資格、自治体との対応等、専門的なことへの不慣れ等で、不安を感じている企業も多いのではないだろうか。

だったら、本会が「町の総務部」として機能することはできないだろうか。

◎おわりに
少子化によって人口が減少していくことは避けられない。
また、外国籍住民が占める割合が年々増加していくこともあきらかだ。

後追いで状況に対応するのでなく、近未来をどのようなビジョンのもとで 地域創生するのかが問われている。

地域の多文化共生拠点として交流や研修ができる「外国籍人材と共に創る地域産業振興人材育成センター （仮称）」を創出するという目標に向けて 様々な方々のお力を得て実現したい。

私たちが働き、暮らしていくために必要な様々な組織、団体などに関わる人たちが 平らに繋がりながり その運営担っていくようプラットフォームができないだろうか。

その「場」で出会った人々の「顔の見える関係性」が原動力となれば、横に繋がるネットワークが一人一人の外国籍人財を支えることができる。
支援が必要な企業へも応援することができる。

「調和がとれた外国籍人財の受け入れ」によって、地域の中での無用な混乱や対立を避け、調和し、力強く 多文化共生社会を創造することができると確信し、その実現を目標としたい。

私たち おおた多文化共生研究会 は、2024年2月に最初の集まりを持った。
全てボランティアベースで、志を同じくする仲間が集っている。

また、仲間たちのバックボーンも様々で、出身の母体も多様で、国籍も様々だ。
現在、日本だけでなくネパール、ベトナム、韓国にルーツがある仲間が集っている。
正に、多文化共生 の 現場である。

会合を重ね、相手に対する敬意を払いながらも なんでも議論できるようになってきた。
国籍を問わず、本会の趣旨に賛同いただける同志が増えてほしいと心から願っている。

2025年８月吉日

※新大久保商店街振興組合 I 顧問 からの手紙

金子　信行　様

早速お送りいただきありがとうございます。
素晴らしいです。

新宿区は外国人が13%
そして大久保、百人町地域には
30〜40%の外国の方が住んでおります。
否が応でもかかわらざるを得ない状況です。

金子さんは自らすすんで
home stay、留学を経験し
また多くの外国の方々を受け入れていらっしゃる
凄いことだと感じました。

これからのご活躍をお祈りしております。
また是非お話を聞かせていただければと思います。

こちらは　第42回大久保まつりを
10月13日（スポーツの日）
11：00〜16：00開催します。
大久保通では車両を通行止めにして
サンバ、日本舞踊等に加え
ベトナム、アオザイパレード
韓国　朝鮮通信使　などがパレードを行います。

今後ともよろしくお願いいたします。

新大久保商店街振興組合
顧問　S.I